

アテネオリンピックを終えて

The Athens Olympic Games is finished

山内 直人

Naoto YAMAUCHI

はじめに

今年8月、ギリシャ（アテネ）にて開催された「第28回 オリンピック競技会アテネ大会」（以降、アテネ五輪）に先立ちまして、柔道競技における日本陣営では、全階級メダル入賞を狙うため、まず、コーチ陣・スタッフ陣の強化による、良いサポート体制を形作ることが要求されていました。

その中で、私が特別コーチに抜擢され、アマチュアスポーツの祭典と呼ばれる世界最高峰の大会、アテネ五輪に携われたことは、この上なく喜ばしいことであり、これから先、私にとっての誇りになることと強く感じてなりません。

アテネまでの道のり

1. 日本柔道の歴史

柔道は、1882年に嘉納治五郎が「日本伝講道館柔道」を創設したのを発端とし、2004年現在まで、122年間、止まることなく歩み続けてきました。

1964年開催の「第18回 オリンピック競技会東京大会」から柔道が正式種目となったことをきっかけに、世界レベルでの普及・発展を果たし、日本国技の「柔道」から世界の「JUDO」へと進化

し、今尚、更なる成長を遂げています。

そのような中、日本柔道はこれまでの世界の強豪を相手に、その強さを遺憾なく発揮することに全力を尽くしてきました。

しかし、近年、ヨーロッパ、特にフランスを中心とする柔道の普及率の飛躍により、世界の「JUDO」における日本の柔道のレベルが、かつてほど突出すべきものではなくなってきたように見受けられます。

これは、世界各国の柔道に対する熱い想いが競技力向上を促し、日本柔道のレベルに肩を並べるものとなったのだと考えられます。

元々、日本人選手は海外選手に比べ、体格的・体力的に見ても優れているとは言えず、基礎体力が土台である柔道において言えば、さらに不利であると考えられます。

日本柔道が、これからも世界でトップの座を維持していくには、今まで以上のバランス良い心・技・体の確立が要求されることと考えられます。

2. シドニーオリンピックの成績

2000年に開催されました「第27回 オリンピック競技会シドニー大会 柔道競技」（以降、シドニー五輪）では、女子48kg級の田村亮子選手が三度目のオリンピック出場で、念願の初金メダルを

奪取したことから始まり、男子60kg級の野村忠宏、81kg級の瀧本誠、100kg級の井上康生らがそれに続き、金メダルを獲得しました。

女子では、52kg級の檜崎教子選手が銀メダル、57kg級の日下部基栄選手、78kg超級の山下まゆみ選手らが銅メダルを獲得しました。

そして、世紀の誤審と言わしめた男子100kg超級の決勝戦、篠原信一選手は、ドゥイエ（フランス）選手が放った内股を、自分の股の中ですかしながら上体を巧みにコントロールし、ドゥイエ選手が背中から畳に落ちましたが、判定はドゥイエ選手の「有効」、篠原選手は、銀メダルに終わり、シドニー五輪・柔道競技の幕は下ろされました。

この大会で、日本柔道は男女合計して「金」4個、「銀」2個、「銅」2個という成績を収め、これは日本にとってオリンピック柔道競技始めて以来の最高成績となりました。

3. アテネ五輪代表決定の手順

さて、シドニー五輪からアテネ五輪にかけての間、柔道における日本の代表選手がどのように決定されていったのかについて説明しておきましょう。

まず、最初にアテネ五輪の前年、11月に行われる講道館杯全日本柔道体重別選手権大会（以降、講道館杯）がアテネ五輪の第一次代表選考会になっており、その成績や内容が考慮されました。

そして、オリンピックイヤーである今年となり、講道館杯での入賞者や強化・指定選手が、それぞれ1月～3月に間に行われたアテネ五輪の代表選考も兼ねたヨーロッパの国際大会に派遣、出場し、その成績や内容が考慮されました。

最後に、年度始めの、4月に毎年、福岡で行われる全日本選抜柔道体重別選手権大会（以降、全日本選抜）がアテネ五輪の代表最終選考会でもあるので、その大会の成績や内容を考慮された結果、発表され、晴れて日本代表の座を獲得したのです。

しかし、男子の100kg級と100kg超級の日本代表選手は、4月の下旬に行われた国内最大の無差

別級の大会である全日本柔道選手権（以降、全日本選手権）の成績や内容も考慮した上で代表が決定されました。

通常ならば、この時点で全階級代表が決定し、オリンピックに向けて発進できるのですが、今回、男子の66kg級、女子57kg級に関しては、5月に行われたアジア選手権大会（以降、アジア選手権）でそれぞれ入賞し、アテネ五輪への出場権を獲得し、正式に代表が決定される形となりました。

また、オリンピックに出場するためには、アジアランキングに載らなければならないという新方式により、今年初の100kg超級出場の鈴木桂治選手は、この大会の出場により、オリンピック出場の個人資格を獲得しました。

今回のアテネ五輪に先立ち、晴れて各階級の日本代表に選ばれた14名は、これまでの中で一番多くのメダル入賞をできるだろう最強のメンバーであると、アテネ五輪では男子のヘッドコーチも担当されました齊藤仁先生がおっしゃられたことと同様に、私も素直にそう思い、アテネ五輪・日本柔道勢に期待をしていました。

その中に、今回の話の中心となる選手が3名います。

まず、1人目は、66kg級代表の座を獲得した内柴正人選手。2人目は、81kg級で代表となった塘内将彦選手。3人目は、100kg超級で代表になった鈴木桂治選手です。この内柴、塘内、鈴木の3選手は、国士舘大学の卒業生であり、私の教え子たちですので、これより先は、普段、慣れ親しんだ呼び名で話をさせて頂きたいと思っていますのでご了承ください。

アテネ五輪代表の経緯と大会成績

1. 内柴 正人

では、最初に内柴について。

内柴は、熊本県出身であり、12歳から柔道を始めました。地元である一の宮中学校に入学。その強さを買われ上京、国士舘高校にスカウトされ、

インターハイでは、60kg級で優勝し、そのまま国士舘大学へ進学、全日本学生体重別選手権大会では、同階級で優勝し、国際大会などでも入賞するなど、めきめきと実力を着けてきました。

大学卒業後も旭化成工業株式会社に入社し、60kg級の選手として打倒、野村忠宏（今大会アテネ五輪60kg級金メダリスト・史上初の三連覇）選手を胸に頑張ってきましたが、試合の度に10kg近い減量を余儀なくされ、度重なる減量失敗、出場失格をしました。

そして、昨年4月の全日本選抜でも計量で失格、本人は第一線から身を引くことさえ考えていました。

しかし、周囲からの勧めやプライベートでの結婚を再起の支えに、66kg級への階級変更を決意し、畳の上に行くことを選びました。

元々、スピードとスタミナには定評がありましたし、それに加えて減量による食事制限がなくなったことで、一回り強いパワーを身に付けたことが力強い海外選手への勝利に繋がったのだと思われます。

しかし、昨年11月の講道館杯優勝、今年4月の全日本体重別優勝による代表候補決定後のアテネへの出場権獲得のための5月のアジア選手権では、5位入賞を果たし、アテネ五輪への切符を手に入れることができました。その中で、大きな重圧を十分に感じたことは、本人にとってのアテネ五輪に向けた貴重な経験となったことでしょう。

アテネ五輪に向けての合宿や調整練習などでも体重制限のなくなった内柴は、肩車や朽木倒などの下から攻める奇襲技と裏投や巴投といった捨身技をよく使い、60kg級時代と比べてもこれらの技の威力が更なる磨きがかかっていると感じられました。

実際、アテネ五輪の試合でも、内柴は、初戦から多彩な技を見せ、大車で一本勝ちし、続く2回戦対戦のダシュダバ（モンゴル）選手は、5月のアジア選手権で一度敗北を喫している相手でしたが、得意の巴投で一本勝ちし、勢いづきました。

3、4回戦もそれぞれ浮落、袖釣込腰で一本勝ちしました。

決勝戦では、クランツ（スロバキア）選手を大内刈で仕留め、一本勝ち、気が付けばオール一本勝ちで初出場ながら初金メダルを手に入れました。

内柴は、日頃から、常に目的意識を持って柔道に取り組んでいましたし、その成果を、最高の舞台でしかも最高の形で、これまで応援して下さった多くの方たちにお見せすることができたことを本人も嬉しく思っています。

これから先、66kg級の第一人者となり、その座を揺るぎないものとするため、そして新しい家族のためにも頑張っていってみたいものです。

2. 塘内 将彦

次に、将彦について。

将彦は、福岡県出身で5歳から柔道を始め、元々の厚木中学校に入学。大牟田高校に進み、そして上京、国士舘大学に進学し、81kg級で正力杯国際学生柔道大会優勝を飾りました。

そして、99年の世界選手権での1回戦敗退から5年間という長い年月をかけて、やっとの想いで日本代表の座を勝ち取り、アテネ五輪の舞台に立つことができました。

病に倒れた父から息子へのアテネ行きを願う熱い想いはもちろんのこと、家族や友人、そして、旭化成工業株式会社に入社、社会人となり、勝っても負けてもいつも応援してくれる会社の人たちに結果を出してお礼が言いたいという気持ちが強かったと思います。

常に、金メダルを狙うと宣言し、良い意味で自分自身にプレッシャーを与えることができ、一瞬の間も逃さない集中力を養ってアテネの地に乗り込んで行きました。

将彦の持ち味である得意の組み手とタイミング抜群の袖釣込腰を中心に攻めきることが、勝利への活路だったと思われますが、今大会では、初戦、ノソフ（ロシア）選手に合技で一本負けし、銅メ

ダルに向けての敗者復活1回戦でもメローニ（イタリア）選手に技ありで負け、敗退しました。

今大会、不本意な結果であったため、応援して下さった方たちの期待に応えることができませんでした。アテネ五輪が過去のこととなった今、そこで得た将彦自身の反省点を見出し、気を取り直して11月の講道館杯に焦点を合わせ、毎日の稽古に励み、なんとか優勝を勝ち取り、復活劇を見ることができました。

このアテネ五輪からの復活を期に、これからも81kg級に塘内健在ということ、周りの方たちにお見せすることができるよう、頑張っているのも、いろいろなものです。

3. 鈴木 桂治

桂治は、茨城県出身で小学校まで地元の石下体育協会柔道場で柔道に励み、小学校卒業と同時に、上京、国土館中学に入学しました。そして、そのまま国土館高校に進学し、インターハイでは100kg級で優勝。高校生初となる講道館杯での同階級優勝を勝ち取り、将来の100kg級のホープとして名乗りを上げました。

しかし、その100kg級には、大きく立ちはだかる男がいました。その男こそ、井上康生選手でした。井上選手は、既に国内外を問わずして、多くの大会で優勝を収め、その地位は揺るぎないものでした。柔道を知っているものであれば、誰でも一度は名前を聞いたことはあるというくらい知名度の高い選手であり、また、その実力は折り紙付きでした。

桂治は、高校時代より、井上選手に追いつき、追い越せと毎日、稽古に励んでいました。そして、国土館大学に進学し、学生の団体戦の東京大会では初対決が現実となり、注目を浴びましたが、結果は引き分けに終わりました。

その後も、二人は幾度となく対戦することとなり、勝ったり、負けたり、引き分けたりと繰り返してきましたが、その試合の度に桂治は、井上選手との差を縮めていったように感じられました。

（現在まで、7戦3勝3敗1分）

また、この頃から井上選手も桂治をライバルと認め、「桂治だけには負けられない」と思うようになっていったと思いますが、井上選手は一步も二歩も桂治より先を走っていたように感じられました。

そして、シドニー五輪では、井上選手が100kg級の代表に選ばれ、桂治がその補欠になりました。この代表決定は誰もが妥当だと思いますが、桂治にとっては、非常に辛かったことだと思います。「なぜ、オリンピックに出場していない俺がこの場にいるのだろう」と。しかし、この経験が後の桂治を大きく成長させていく理由になったと感じられました。

「次のアテネ五輪は、俺が代表だ」という桂治の強い気持ちが、毎日の稽古や生活を通し、監督である私にも強く感じられました。

桂治は大学卒業後も、井上選手に勝つため、血の滲むような稽古を、大学の柔道場で行っていました。

ここで、少し余談を。私は国土館高校、大学のOBであり、今は、大学の監督を務めています。国土館の強さの支えには、こういった縦社会の充実が一番に挙げられると思っています。OBの方たちの「後輩のためなら！」という強い気持ちが後輩たちにしっかりと浸透しているからこそ、今の国土館大学柔道部があるのだと、私は確信しています。

話を戻しますが、今回のアテネ五輪、桂治100kg超級での出場ですが、先程から述べているように、本来100kg級の選手です。

桂治の目標であり、ライバルと称される井上選手が100kg級代表に選ばれたため、100kg超級の代表枠を中学時代からのライバルで、無二の親友でもある棟田康幸選手と今年の4月下旬に全日本選手権で争うこととなりました。両者とも順当に勝ち上がり、準決勝で対戦し、桂治は優勢勝ちを収め、晴れて100kg超級代表となりました。決勝では、井上選手に優勢勝ちをし、井上選手の三連

覇を阻止。この大会を初優勝で飾り、アテネ五輪をいい形で迎えることができました。

この時の桂治は、3月に後輩との稽古中に痛めた左手薬指が完治していなく、満身創痍であったのですが、一戦一戦に全精力を賭けて戦っていました。

アテネ五輪100kg級代表の座を賭け、4月初旬に行われました福岡の全日本選抜で井上選手と対戦する前に、準決勝戦で井上選手の実兄でもある井上智和選手に一本負けを喫したことで、アテネ五輪100kg級代表への道が閉ざされてしまいましたが、オリンピック出場への希望を100kg超級代表選手獲得という形で繋いだことは、桂治の執念の賜物であると思います。

アテネで私は、選手のサポートに尽くしてきましたが、桂治は試合当日までDVD鑑賞やキャッチボールをして、リラックスした時間を過ごしていました。

今大会、日本柔道勢は初日から最高の流れで好スタートを切りました。

初日、女子48kg級の田村選手が三度目のオリンピック出場で大会二連覇を収め、男子60kg級の野村選手が三連覇を成し遂げました。

2日目、初日に続き、女子52kg級の横澤由貴選手が銀メダル。男子66kg級の内柴が全試合一本勝ちで金メダル。共に、初出場ながらメダルを手に入れました。

3日目、女子57kg級の日下部選手は、4年前のシドニー五輪銅メダリストですが、今回二度目のオリンピック挑戦では、前回の銅メダルにさえ手が届かず、3回戦敗退を喫しました。男子73kg級の高松正裕選手は、大会前の体調不良が尾を引き、初のオリンピックを2回戦敗退で終わりました。

4日目、女子63kg級の谷本歩美選手は、オリンピック初出場ながら全試合一本勝ちで金メダルを獲得しました。男子81kg級の将彦は谷本選手と同じくオリンピック初出場でしたが、持てる力を全て出し切ることなく、1回戦敗退と無念に終わりました。

5日目、女子70kg級の上野雅恵選手は、二度目のオリンピック出場で初の金メダルを手に入れました。男子、90kg級の泉浩選手は今大会柔道競技日本代表選手して最年少での出場でしたが、オリンピック初出場ながら銀メダルを獲得しました。

6日目、女子78kg級の阿武教子選手はオリンピック三度目の出場で、初の初戦突破を実現。その勢いそのまま金メダルを手に入れました。そして、男子100kg級、日本柔道界の至宝と称される井上選手は、今回アテネ五輪日本選手団の主将を務め、前回のシドニー五輪の同階級金メダリストであり、二連覇確実と言われていましたが、4回戦敗退と誰もが予想し得ない結果となりました。試合会場で、井上選手の試合を見ていた私は、すぐに桂治に連絡を取り、「井上が負けたぞ」と伝えました。「そうですか」と返す桂治に、

「試合は強いものが必ず勝つとは限らない、桂治、明日は思い切り戦って来い」

と伝えました。

柔道競技最終日の7日目、桂治は最高の仕上がりで試合に臨むことができました。

この日、先に行われました、女子78kg超級の塚田真希選手は全試合一本勝ちで初出場金メダルを手に入れました。

今大会、桂治は100kg超級での出場ということで、当然、対戦する外国選手全員が桂治よりも大きく、そして重い選手ばかりとなりました。そのため、桂治の作戦も相手の勢いが衰え始める後半を狙っての攻撃に徹することとなりました。その作戦は見事の中し、初戦こそ硬さが見られたものの、2分過ぎに払腰で技ありを取り、優勢勝ちしました。

続く3回戦、4回戦、準決勝戦と後半勝負の作戦に徹底し、それぞれ内股で一本勝ちを収め、決勝戦に進みました。決勝戦では、優勝候補筆頭であったトメノフ（ロシア）選手との対戦となりました。桂治は序盤、トメノフ選手の攻撃に対し、自分の間合いを保ちながら自分のリズムを作っていました。そして、1分17秒、小外刈で捻り倒

すようにして、一本勝ちを収め、この階級16年ぶりとなるオリンピック金メダルを日本持ち帰ってきました。アテネ五輪で日本柔道の有終の美を飾ってくれた瞬間でもありました。

桂治の勝利は、全試合を通し、常に相手にペースを掴ませることなく柔道を展開し、攻め続けたことが勝因に挙げられると考えられます。最後まで、その作戦は変更することなく、全うしたことが初出場初金メダルという結果に繋がったと言えるでしょう。

桂治には、これからの日本柔道界を背負って、活躍してもらいたいと思います。

(日本柔道 合計、金8個・銀2個を獲得)

おわりに

今回、紹介した3人の柔道家たちは、柔道と共に生き、それぞれの道のりを経て、様々な想いを抱いてアテネの地に降り立ちました。

ある者は、自分に与えられた使命を果たすため。ある者は、今まで支えてきてくれた人たちに恩返しするため。ある者は、どん底から這い上がり、新しい絆を手に入れ、世界一の称号を手に入れるため。

結果はどうであれ、これからの人生にとってプラスになっているはずでしょうから、これからの彼らの活躍にも期待したいと思います。